

『詩経』から『列女伝』へ——「男の読み手」からのことば

平田昌司

「自分は古典の研究者だと思っています」という意味の静かなことばを聞いたのは、北白川追分町でのことだっただろうか。みどり先生と言えば、なによりも楊絳だろう、それから錢鍾書に丁玲に郭沫若、だから中国近現代文学が専門——ずっとそう信じていたものだから、どう返事をしていいのかわからないまま、辞去してしまった。言われてみれば、『書経』の訳書が出たのは三〇歳のときだし、筑摩版『詩経』があって、聞一多の古典研究の紹介もある。

それなのに、「古典の研究者だ」と言われて、なぜ腑に落ちなかったのか。みどり先生の古典研究は、なんだか副業のように思えたからだ。たとえば筑摩版『詩経』は、拍子ぬけしてしまうほど、おとなしく書き始められている。本の半ばあたりから、ときどき書き手の声が現れ、叙述が突然駆け出すような箇所があるものの、再びたちどまり、まるでここから向こうに出るまいと決めたかのような表情の文章にもどることがしばしばである。まるで「私は、新しい仮設を私自身によって出すことをつとめて避け」る（吉川幸次郎『詩経国風』）自己抑制を守っていこうとするかのように。一九八一年に書かれた「丁玲の軌跡」から受けるくっきりした印象と比べてみれば、落差の大きさはいやでも目につく。

一九八三年に完成した筑摩版『詩経』を執筆するにあたっての著者自身の違和感はなんだったのだろう。その理由は、意外なことに、翌年八月の『『幹校六記』訳者あとがき』の「中国の文学というか、文章表現というものが歴史的に常に抱えこんできた問題」をとりあげた部分でもらされているように思われる。そこでは、二千年以上にわたって、「道徳的・社会的効用が文学の主要な価値」であったのみならず、「その表現の方法もきわめて限られた伝統的な方法、様式に従わねばならなかった」ことを踏まえ、次のように指摘される。

……教条主義的な文章があふれ、「帝王将相才子佳人」を「現代の英雄烈女」におきかえただけの活劇風の作品が文学の世界を席捲したのは、だからむしろ、五四のもたらした、中国にとって異質な「近代」を拒否し、民族の伝統に帰ることであったかもしれないのである。

『詩経』は、もともと古いうたの本であったはずである。なのに、古い注釈を媒介にすると、ほとんど社会規範・家族規範の教条としてしか読めない。なぜ制度的規制が強固に支配するのか、なぜ現代にまで続く「民族の伝統」は成立してしまったのか、始原の表現はどのようなものでありえたのか、という問いへの答えを摸索しつつ、最後まで結論を得られなかったがゆえに、筑摩版『詩経』は控え目に書かれざるを得なかったのではないだろうか。

それと比べて、亡くなられた後に現れた『列女伝』は、全く新しい印象を与えるものだった。記述に、ためらいは、もはや見られない。なによりも、他者にできる限りよく聞こえるはっきりした声で最後まで語りとおそうとする意思

があり、「私」の読みが躊躇することなく語られる。附帯して、独立の作業としてのテキスト・クリティクや考証にかけられた手間ひまのほどは言うまでもない。初め、わたくしは『列女伝』のできばえと筑摩版『詩経』からの叙述の変化に感嘆した。しかし、読むうちに、別の思いを抱くようになった。書物の本文は、読み手によってある磁場におかれたとき、特定の力を外から与えられ、それまで見せたことのない結晶の姿をとることがある。『列女伝』に整列した方向を与えた外的な磁場はなにか。それを思うと、叙述の強さが、男の読み手にはつらい。

ここで、研究者としてのみどり先生が扱われた作品をふりかえってみると、不思議なことに気がつく。古典は『書経』『詩経』『説文解字注』『列女伝』——いずれも儒学の正統的なイデオロギーによって書かれた、あるいは解釈を縛られている飼い慣らされた書物ばかりである。規範や教条からの逸脱を内包する作家・作品は含まれていない。ところが、現代文学においては、「ユーモアと借古諷今」という面で評価を与えられている郭沫若、率直すぎる発言ゆえに筆を折らざるを得なかった丁玲、「機智にあふれた諷刺をよく」するなど「(文学作品であれ研究論文であれ)ほかの中国人のものとは違」う楊絳、無名の個人たちの声を拾おうとする『中国の一日』。どうしてこれほどまでに対象の傾向が異なってしまったのだろう。

そうしてみると、これから書かれる必然性がありながら、書かれることのなかった古典に関する仕事がある、ということになりはしないか。一九八八年十二月に「文学芸術とその根源にある人間の想像力の原初のありよう」を探る聞一多『中国神話』の訳を仕上げ、白川静の学説や近年の楚系出土資料にも関心を寄せておられたことから察するに、規範や教条によって束縛されるようになる以前、人はどのように表現しようとしていたのかが、次に取り組むべき課題としてあらわれて来ざるをえない。これは、『列女伝』と全く逆の方向をめざす動きになる。みどり先生の本領は、「そうでないと思うから私は口ごもって言えない」、「全部について問い直さなければしょうがない」とかつて語られたような疑問を、清朝から1940年代までの学風への理解と愛惜を遠景において、口にされるときに見られた。『中国神話』の出版は一九八九年二月のことである。さらに、同年六月四日のできごとがなく、そして矢野事件がなかったならば、や

がて、規範に覆い隠された深層、その全部についての問い直しの試みを読む機会を与えられただろう、と思われてならない。

初めてお目にかかった一九七三年、面識もないのに断りもなく自宅の玄関に現れるという非常識を許し、相手をしてくださって以来、折々に寛容さに甘え続け、ほとんど三十年になる。何回かの座談の席で、傍観者として話を聞き、「異議は、それがたとえ微かな声であろうとも、異議であることには変わりがない」とのある人のことばさながらに、どの表現を選んだものかと探りつづけながら質問される意図を単純化するむずかしさを思い知る機会はなんどもあった。けれども、思い起こしてみれば、この文章を書くまでたぶん一度も、正面から学問を対象として、お考えをうかがってみたことはなかった。 (京都大学)